

産褥期の乳頭損傷に対するピアバーユの有効性について

原 恵子¹・中尾 優子²・山本 直子³・大石 和代²

要旨 産後に生じた乳頭損傷に対し、ピアバーユが有効であるかを検討した。乳頭損傷を起こした褥婦56名の乳頭の観察を行い、乳頭損傷内容が一致した33名の母親の片側の乳頭に母乳を、対側の乳頭にバーユを塗布した。その結果、12名の褥婦が研究期間内に両側ともバーユを選択し、両側に母乳を選択したものは認められなかった。また、バーユ塗布開始群は母乳塗布開始群に比較し5日目、6日目に両側に疼痛の自覚状況が有意に改善していた。しかし、疼痛の性状については両群間に有意の差はなかった。ピアバーユは乳頭損傷の疼痛の自覚状況に対して有効であることが示唆された。

保健学研究 19(2): 59-63, 2007

Key Words : 乳頭損傷, 乳頭亀裂, バーユ

(2007年1月23日受付)
(2007年3月22日受理)

I. 緒言

出産後、早期の頻回授乳により、乳頭の損傷（発赤や亀裂など）を発生して苦痛を訴える母親は多い。この乳頭損傷を予防するために、妊娠中から乳頭マッサージなど各施設で様々な取り組みが行われている¹⁾。これにも関わらず生じた乳頭損傷は、痛みにより直接哺乳が困難になることや乳腺炎の原因になることが指摘されている^{5,6)}。今回、カネソン本舗より産褥期の乳頭損傷にピアバーユが有用との情報⁷⁾を得たので、その有効性を検証することとした。

ピアバーユは馬の脂100%を原料とし、 α -リノレン酸の含有率が高く、皮膚を薄い膜で保護すると同時に、皮膚への浸透力が強い⁸⁾ため炎症を抑える効果があるとされている⁸⁾。

II. 研究目的

産褥期の乳頭損傷に対するピアバーユ（以下、バーユと略）の有効性を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究対象および期間

長崎市内のM医院で分娩した227名の褥婦のうち、乳頭損傷を認めた110名（48.5%）に対して研究内容を説明した。そのうち研究への協力を得られた56名の乳頭を観察し、両側の乳頭が同程度の損傷で、しかも疼痛の自覚状況や性状が同程度であった33名を対象とした。

2. 研究期間

平成13年9月1日から平成14年3月31日。

3. 研究方法

協力を得られた褥婦の一侧の乳頭に母乳、対側の乳頭にバーユを塗布する介入研究を実施した。なお、バーユはカネソン本舗のカネソンピアバーユ[®]を用いた。

1) 研究に際しての母親への説明

- ①乳房の片側にバーユ、対側に母乳をそれぞれ乳頭乳輪部まで薄く塗布する。
- ②毎回の授乳直後に塗布し、授乳前には拭きとらない（原料の油の馬は無農薬の牧草のみで飼育され、バーユに添加物は一切していないため児が口にしても害はないとの安全性がすでに確認されている）。
- ③退院日まで片側にバーユを対側に母乳を塗布する。ただし、調査途中でバーユから母乳へ変更、あるいは母乳からバーユへ変更、または塗布を中止しても構わず、その都度選択できる（以下、塗布行動変化と表現）。

2) 研究者間の確認事項

- ①乳頭損傷は授乳姿勢や乳頭の含ませ方にも関係するので、適切な授乳姿勢や乳頭の含ませ方の指導介助を適時行う。
- ②バーユ、母乳両方の効果を調査していることを母親に説明する際は、どちらか一方に効果があるような先入観を与えない。

3) 観察および聞き取り内容の数値化

乳頭損傷を認めた日から退院日（6日目）まで1日1回、両側乳房の乳頭を観察し、乳頭損傷を番号化して記録した（表1）。実際の塗布内容および疼痛の状況や性

1 元松本産婦人科医院

2 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

3 長崎市医師会看護専門学校

表 1. 乳頭損傷

1	2	3	4	5	6	7	8
発赤	水疱	血疱	痂疵	糜爛	亀裂	出血	潰瘍

表 2. 疼痛の自覚状況

0	1	2	3	4
痛みなし	含ませる時のみ痛みを感じる	含ませている間中痛みを感じる	含ませない時にも痛みを感じる	含ませられない程に痛い

表 3. 疼痛の性状

0	1	2	3
なし	ひりひり (軽い)	きりきり (中程度)	ずきんずきん (非常に痛い)

状については、午前中の乳房ケア時に、母親から聞き取りを行い、点数化した(表2, 3)。また、その時の母親の言動を記録した。

4. 分析方法

褥婦の塗布行動変化は χ^2 独立性の検定、疼痛の自覚状況と性状はマン・ホイットニー検定を行った。

IV. 結 果

1. 対象者の属性

褥婦33名の内訳は初産婦15名、経産婦18名で、平均年齢は 28.6 ± 4.7 歳であった。

2. 発見時の乳頭損傷所見

乳頭損傷発見時の所見を図1に示す。発赤17名(51.5%)が最も多く、次いで痂疵10名(30.3%)、亀裂7名(21.2%)、水疱・糜爛1名(3%)の順であった。

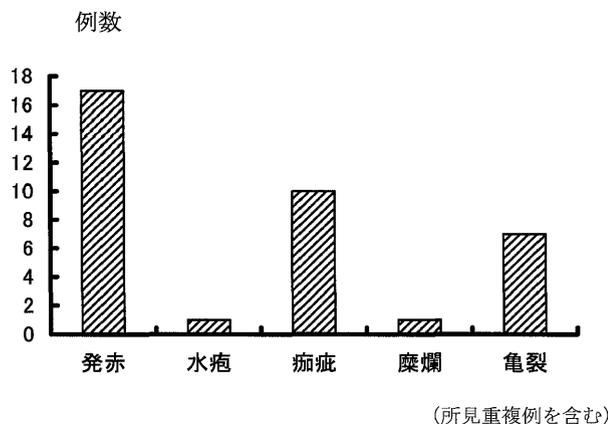


図 1. 乳頭損傷発見時の所見

3. 塗布行動変化

片側母乳塗布、対側バーク塗布から両側ともにバーク塗布に変更した褥婦が全体の36%にみられ、両側ともに母乳塗布に変更した褥婦は認められなかった($P=0.03$)(図2)。母乳からバーク塗布に変えた褥婦の内訳は、3日目3名(25%)、4日目5名(41.7%)、5日目3名(25%)、6日目1名(8.3%)であった。実際、母乳塗布はバーク塗布に比べ乳頭損傷部の乾燥が強く皸裂をきたし、そこにブラジャーやパジャマなどの衣類が接着して外部からの刺激を受け易い状態であった。褥婦は、「バリバリする」、「パジャマに触れただけでも痛い」などと訴えた。一方、バーク塗布では、「パジャマにくっつかない」、「つけ始めて楽になった」、「ひどくならなかった」、「治りがいい」などといったコメントが多かった。また、「薬と違い授乳の度に拭き取らなくて便利である」、「児が吸い易そうにしている」、「マッサージし易い」、「伸びが出て来た」、「退院後も使い続ける」といったバーク塗布を積極的に肯定するコメントも認められた。

4. 疼痛の自覚状況と性状の経時的変化

母乳塗布開始群(以下、母乳群)、バーク塗布開始群(以下、バーク群)の疼痛の自覚状況と性状の経時的変化を図3, 4に示した。疼痛の自覚状況は、母乳群では発見時から退院日まで高い点数を維持していたが、バーク群は3日目をピークに減少し、5日目と6日目は母乳群に比較し、いずれも有意に点数が下がった($P<0.05$)。疼痛の性状についてはバーク群、母乳群ともに2日目をピークに下降し、両群間に差は認められなかった。

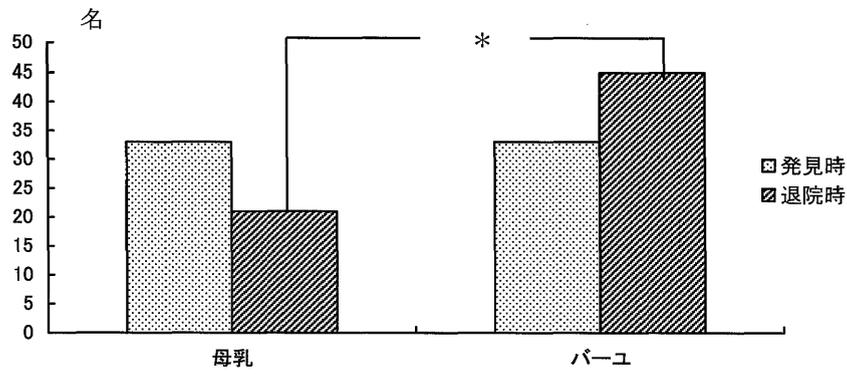


図2. 褥婦の塗布行動変化 *P=0.03

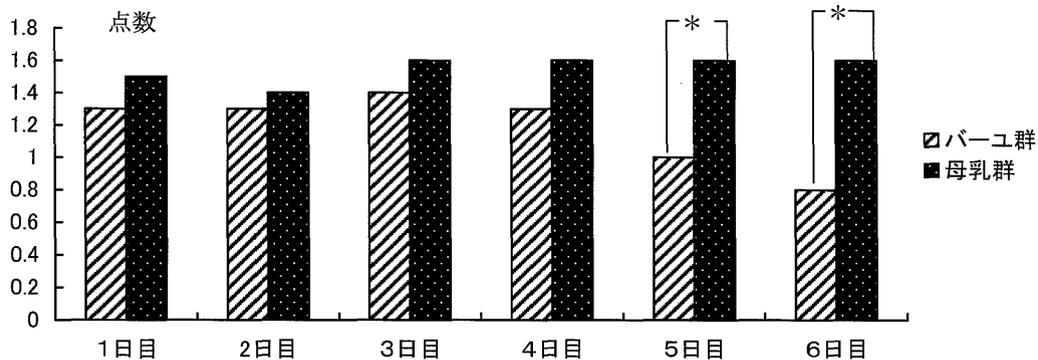


図3. 疼痛の自覚状況の変化 *P<0.05

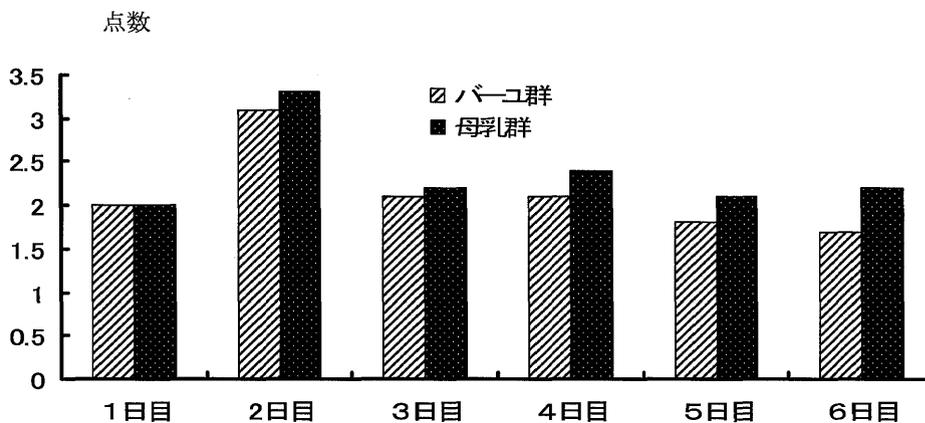


図4. 疼痛の性状の変化

V. 考 察

乳頭損傷発見時の所見で最も多かったのは発赤であり、次いで痂皮、亀裂、水疱、糜爛の順であった。児の吸啜開始とともに、表皮の一部が剥脱して赤肌が生じ、さらにその後の頻回授乳で水疱や亀裂を形成する⁹⁾。今回の観察でも同様の所見が経時的に認められ、産褥初日から乳頭ケアの方策を練ることは重要といえる。

疼痛の自覚状況はパーユ群、母乳群ともに3日目で高い点数を示し、同時期に母乳からパーユに変更する母親が増加していた。褥婦も、母乳塗布では下着に接着することや「ぱりぱりする」といった違和感を訴えている。

一方、パーユ群でパーユ塗布を肯定するコメントが大半を占めていた。すなわち、パーユの油性成分が皮膚の表面や損傷部位の乾燥を防ぎ、保湿することで乳頭を保護し、衣類の摩擦や外部からの刺激を和らげているものと考えられた。さらに、母乳群では途中からパーユ塗布に行動変化をきたした褥婦が12名(36%)みられたが、疼痛の自覚状況に改善は認められなかった。母乳群に比較し、パーユ群では5日目と6日目に疼痛自覚状況の有意な改善が認められた。両群間で4日目から差が認められることから、乳頭損傷の発生早期あるいは発生する前の段階で予防的にパーユを塗布するなど、パーユの塗布開

始時期を早める方がより有用と思われ、今後さらに検討する必要性があろう。今回の検討では両群間に疼痛の性状については有意の差を認め得なかったが、観察2日目以降母乳とバーユでは母乳の方が高い値を示し、その傾向は退院日まで継続していた。

松原^{10,11)}は乳頭皮膚のトラブルに対して、医師は抗生物質やステロイド剤入りの軟膏を処方することが多いが、母親はケミカルな薬剤の児に及ぼす影響を憂慮し、塗布したがるなことが多いと指摘している。今回用いたバーユなどの無害の保護剤は母親が安心して選択するものと推測され、しかも疼痛の改善にも有用な製剤であることが示唆された。

VI. ま と め

産褥早期は乳房の緊満や乳汁うっ滞が顕著な時期であり、しかも乳頭損傷の痛みを伴えば、褥婦にはかなりの精神的、肉体的苦痛が強いられる。母乳育児を継続させるケアの1方策として、バーユ塗布は有用と思われる。

謝 辞

本研究を行うに当たり、ご協力いただきましたM医院のスタッフの皆様方並びにお母様方に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 武石みち代, 熊谷孝子, 熊谷淳二: トラブルをおこさないための乳房ケア 産科診療所における母乳育児支援体制について. ペリネイタルケア, 21: 8-13, 2002
- 2) 山西みな子: トラブルをおこさないための乳房ケア 妊娠中からの母乳育児への準備とケア. ペリネイタルケア, 21: 14-19, 2002
- 3) 小林 緑, 岡崎範子, 小井かおり, 佐々木直美: 産褥期からの乳頭損傷予防に対する妊娠後期からの乳房ケアの有効性 外来での実技指導を取り入れて, 広島県立病院医誌, 29: 159-167, 1997
- 4) 林 栄子: 妊娠中の乳房管理. 周産期医学, 26: 504-508, 1996
- 5) 市塚清健, 岡井 崇: 産褥期の乳房マイナートラブルとその対策 産婦人科治療, 82: 24-28, 2001
- 6) 竹下茂樹: 乳房観察と必要な検査. ペリネイタルケア, 24: 10-15, 2005
- 7) 須貝哲朗: カネソン“ピアバーユ”の皮膚安全性および保湿能に関する報告書
- 8) 帯津良一: 自然馬油. アトピーを治す大辞典, 268-269, 1992
- 9) 鮎澤幸枝: 乳頭トラブルの対応. 助産婦雑誌, 50: 31-15, 1996
- 10) 松原まなみ: トラブルをおこさないための乳房ケア それでも乳房トラブルがおこってしまったら. ペリネイタルケア, 21: 32-39, 2002
- 11) 松原まなみ: 母乳が飲ませにくいとき—母乳育児を困難にする要因とその対応—. 母子保健情報, 47: 82-87, 2003

The effectiveness of Pia Baryu on nipple damage during postpartum

Keiko HARA¹, Yuko NAKAO², Naoko YAMAMOTO³, Kazuyo OISHI²

1 Formerly of Matsumoto Obstetrics and Gynecology Clinic

2 Department of Nursing, Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

3 Nagasaki City Medical Nursing School

Received 23 January 2007

Accepted 22 March 2007

Abstract In this report we examined the effectiveness of the topical ointment Pia Baryu on nipple damage. Mother's milk was applied to one of 33 puerperant women's damaged nipples, while Pia Baryu was applied to the other. Both nipples were carefully observed during the trial. During the trial 12 women requested application of Pia Baryu to both nipples, though no mother's chose to apply mother's milk to both.

Pia Baryu shortened sharp nipple pain significantly, while mother's milk no impact, we therefore suggested Pia Baryu as an effective way to reduce pain in damaged nipples.

Health Science Research 19(2): 59-63, 2007

Key Words : nipple damage, nipple crack, Baryu